

日本説話「竹取物語」におけるかぐや姫と翁について

千野 美和子

I、初めに

ここで取り上げる『竹取物語』は別名『竹取の翁物語』『かぐや姫物語』ともいわれ、『源氏物語』^{えあわせ}絵合の巻に「物語の出できはじめの祖^{おや}」と書かれるように日本最古の物語である(稲田ら、1994)。上坂(1978、p.213)は、原典そのものには、作者の深い意図があり、「真の価値ある生き方の回復を訴えかけた寓意的作品」と述べ、その思想は源氏物語に引き継がれているという。古典文学として原典を読む機会がなくても、竹の中から生まれ、翁に育てられ、成人後貴人や帝から求婚されるが、誰とも結婚せずに月に帰ってしまうかぐや姫の話は日本人ならば誰もが知っている。この話は語り伝えられたり、あるいは書物として書き写されたりしながら、千年以上たった今も、絵本やアニメの形を取りながら脈々と受け継がれている。

この物語は個人の創作とされるが、柳田(1963、p.161)は、「竹取物語が純然たる一個の創作で無く、世にある説話を採って潤色したもの」と、幾つかの説話を合わせたものであると述べている。小沢(1958)はグリム昔話とこの話を比較して、この話の昔話的要素を5つの点、すなわち1.小人話(異常成長話)2.致富譚3.人間界と月世界(此岸と彼岸)4.つまどい(求婚譚)5.形容の極端性から論じている。また、上坂(1978)は異常出生の話、求婚難題の話、天人女房・白鳥処女説話などの旧来の伝承を駆使し、昔話の形式を踏襲して新しい作品として再生したものと述べる(註1)。以上のように、この物語には、幾つかの昔話的モチーフが語られていること、そして、その物語の展開は作者の独自性を持ちながら、日本昔話の特徴が表現されていることがわかる。

本論では、この物語に含まれる昔話のモチーフをいくつか取り上げて、他の昔話と比較しながら、昔話の視点でこの物語を検討したい。特に、別名を『竹取の翁物語』と呼ぶように、かぐや姫を主人公にした視点とともに、竹取の翁の視点から見た物語としても取り上げたい。

また、『竹取物語』についてはユング派の豊田園子氏の講演がある(註2)。その講演内容も参考にさせていただきながら論じて行く。

II、『竹取物語』と昔話

この物語との関連が示唆される昔話に「竹姫」がある。

関(1978b)はこの昔話を「本格昔話」の「誕生」の中の一つ146「竹姫」としてまとめている。そして、その解説として、「民間の伝承は私の知る限りでは少ない。しかもいずれも断片であり、資料価値が低い。(中略)竹取物語、かぐや姫の系統をひくものであるが、証明は困難である」と述べている(関、1978b、p.127)。

稲田(1988)は、「むかし語り」の「VI 誕生」の<異常誕生>の130「竹娘」のタイプとして分類している。このタイプのモチーフは次のモチーフからなる(p.288)。

- 1、 貧しい竹切り翁が切った竹の中に女の子を見つけ、子にして育てる。
- 2、 成長した娘は、昇天のときがきた、と告げ、翁に赤いしゃもじと杓子とを残して天に昇る。
- 3、 翁はしゃもじと杓子で水から飯と汁を作り、幸せに暮らす。

稲田(1988)は『竹取物語』の影響を多分に受けていることは否定できず、民間口承の昔話としての内容は乏しいこと、また「異郷の超越的存在の人間界への仮の出現ということで、広義の異常誕生として揚げておく」と述べている。

関、稲田共に対応するATを挙げていない。

稲田ら(1994)によると、この昔話の報告例は多くないこと、『竹取物語』と話の状況が共通していることは、この説話の古さを示すものであると同時に、この物語文学と無関係に口承されることの困難さが示唆されるとまとめている。

また、伊藤(1973)は、東アジアの竹取説話の中に『竹取物語』と類似性の高い話を挙げています。「竹の中

から小さな女の子が生まれる」、「3人の求婚者に課題を出すこと」、最後は「月に帰っていく」モチーフは同じである。また、チベットの説話の中に含まれる「竹娘」は5人の求婚者に出す難題が『竹取物語』のそれと極めて近いことが指摘されている（野口、1979）。ただし、チベットのそれは、最後は育ててくれた女性の息子と結婚する。

『竹取物語』と「竹姫」に共通しているモチーフは、「竹の中に小さな女の子がいる」「最後に昇天（月に帰る）」ことである。それに伴い爺が、『竹取物語』では竹に入っている金を見つけて、「竹姫」であれば姫の残した呪宝で豊か（幸せ）になることである。『竹取物語』だけに見られるモチーフとして「求婚難題」がある。ここでは、これらのモチーフを中心に他の昔話や類話と比較検討しながら、昔話の視点でこの物語を考えて行く。

Ⅲ 異常誕生と致富

まず、『竹取物語』の始まりを見たい。「竹取の翁という者が、根本が光っている竹から大変小さい女の子を見つけて家に連れて帰り、媪とともに育てた」（上坂、1978『竹取物語』現代語訳より）。この始まりは、稲田が「竹娘」のタイプのモチーフ1に挙げているものと一致しており、『竹取物語』は昔話の「異常誕生」のモチーフを含むと考えられる。

このモチーフ1について、関（1978b）の挙げている類話を見てみると、「爺婆に子供がない。爺が山で木を伐ると中から赤ん坊の泣き声がする。その木を伐ると女の子が出る。神のくださった子と喜ぶ」「お爺さんの籠屋師が竹伐りに行き、大きな一節を持ち帰って、割ろうとすると中から女子が出て来る。かごや姫と名づけ子のない老夫婦は大事に育てる」「爺婆が子供を欲しがっている。竹藪で竹を伐ると中に小さな子供の格好をした神様がいる。この子を育てる」「子供のない爺婆が神仏に祈願する。爺が竹を伐っていると中から女の子が出る。連れ帰って育てる」「子供のない竹取の翁が竹を伐っていると竹の根から小さな子供が出る」「竹を伐って暮らす爺が竹林で元の光る竹を見つかる。中から女の子が出て来る。籠屋の爺と婆だからかごや姫とつける。すぐに大きくなる」などと語られる。そこには、物語同様竹の中から生まれた不思議な誕生と小さな女の子がすぐに大きくなる異常な成長の速さが語られる。

議な誕生と小さな女の子がすぐに大きくなる異常な成長の速さが語られる。

子のない夫婦（爺と婆、場合により爺のみ）が、竹の中にいる小さな女の子を見つけ育てるところから話が始まる。神仏に祈願することや子を望んでいる文章がない類話でも、竹の中で見つけた子どもをととても喜んでいる様子が伝わる。『竹取物語』では、直接的に子どもを望む様子は描かれていないが、子どもを見つけた時爺は「我、朝毎夕毎に見る竹の中におはするにて知りぬ。子になり給ふべき人なめり（私が毎朝毎晩見ている竹の中にいらっしゃるので、分った。私の子におなりになるべき人なのだろう）」（上坂、1978、pp.13-14）と言って連れて帰る。翁の姫を見つけた時の思いが語られる。

「神仏に祈願」「神のくださった子」「子供の格好をした神様」と文字通り人の子どもではなく、神（天）から授けられた子どもであることが語られる。稲田の語るように、異常誕生の昔話に挙げられている他の昔話と比較して、「超越的存在」の関与が大きい。

「異常誕生」の子どもは、大人になりその土地の祖となる、あるいは鬼退治などの偉業を成し遂げる者が多く、その人物の偉大さを裏付ける要素としてこのような不思議な誕生が語られる場合が多い。しかし、ここでは偉業を成し遂げるためでなく、純粹に爺に幸せを与えるために、人の子どもの姿と成り地上に降りたことが強調される。

では何故竹取の翁の元にこの姫が下されたのか。それは物語の終盤になってやっと語られる。迎えに来た天人が翁に「いささかなる功德を、翁作りけるによりて、『汝が助に』とて、片時の程とて下ししを、そこらの年ごろ、そこらのこがね給ひて、身を変へたるがごとくなりたり（ちょっとした功德を、爺、お前が積んだので、お前の手助けにと思って、少しの間と言って（爺のもとへ、かごや姫を）下したのに、多年、たくさんの金を与えられて、昔の爺とは思えないほどになった）」（上坂、1978、pp.188-189）と述べる箇所があり、竹取の翁が何らかの功德を積んだことがわかる。功德という仏教的エピソードを挿入したことに対しての小沢（1958）の指摘があるが、翁の人柄を表わすものと考えられる。

翁は竹を採って竹細工を生業にする貧しい（註3）ながらも善行を行うことができる人物であった。それ

を天が見ている、翁にかぐや姫を下し、その上に金を与えた。翁の物語として見れば、善行ゆえに裕福になった翁の致富の物語と読むことができる。『竹取物語』としての結末は昇天した姫との別れに嘆く翁が強調されるが、「竹姫」の結末、姫は昇天したが、姫の残してくれた呪宝のお蔭で幸せになるという同様のテーマが根本にはあると考えられる。柳田 (p.180, 185) は竹取の翁が「一朝にして寶の兒を見つけ、安々と富を積んで長者になつたといふことは、それだけでも大なる驚異であり、乃ち又永く傳ふるに足る事柄」だとし、昔話の数多いタイプである「一箇貧人の致富譚」であったと結ぶ。まさに、翁の語る言葉通り、かぐや姫は竹取の翁に見つけられ、翁の子となるために竹の中に入ったのである。その出会いゆえに、翁の姫への愛情は並々ならぬものが窺える。

IV、求婚難題

大人になった姫の美しさは世界中の男に知れ渡り、なかでも五人の貴人が熱心に姫に求婚する。姫は結婚などしないときっぱり断るが、翁は貴人に会うことをさらに勧める。そこで姫は「五人の人の中にゆかしき物をみせ給へらんに、御志勝りたりとて、仕うまつらん（五人の人たちの中で、私が見たいと思う物を見せて下さるような方に、他の人より愛情が深かったとして、お仕え申し上げます）」（上坂、1978、pp.39-40）と出されたのが、五人に与えられる難題である。

男性の求婚に対して難題を与える日本の昔話は、稲田のタイプではⅨ婚姻<婚姻の成就>の難題婚（241から252）に分類されている。娘を見染めた男が誰かの助けで娘の出した謎を解く。または、長者の出した難題を娘の助けを借りてやり遂げるなど、どの話でも難題をやり遂げて、婚に迎えられる。娘自身が出す場合と父親の長者が出す場合があるがどれも難題に成功し結婚する。求婚難題というテーマは同じだが、『竹取物語』とは異なることが分かる。まず、日本の昔話の女主人公は決して結婚したくないとは思っていない。結婚しなくてすむための難題ではなく結婚するための試練のための難題である。それゆえ結婚は成就される。女主人公の思いの違いが正反対の結末を生み出す。

稲田（1988）の挙げている AT 対応関係タイプでは、

娘の出す謎は AT851A Turandot に対応する。リュートイ（Lüthi, 1968:野村訳、1974）は謎かけ姫として、トランドット姫の物語を載せている。「姫は結婚を欲しない。そこで求婚者すべてに謎を出す。謎が解けない者は首を切られる」（Lüthi, 1968:野村訳、1974、p.163）。また、河合（1977）はこのタイプに分類されるグリム昔話の「なぞ」を紹介する。ある都にきれいだが高慢な姫がいて、姫が解けない謎を出す者があつたらその相手と結婚する。ただし解けてしまったら姫が相手の首をいただく。主人公は姫の美しさに目がくらみ、姫に謎を出すことになる。どちらの昔話も、最終的には姫の謎が解かれる、あるいは姫が解くことができないで、姫はその男性と結婚することになる。

求婚者の男性から見た場合、かぐや姫はどのように映るのだろうか。その美しさゆえに姫を自分の物にしたくて姫に求婚する。不可能な難題を出されてもなお未練の断ち難さゆえに、難題に取り組み失敗する。五人それぞれの取り組み方であり、そこに五人五様の人となり表現される。その失敗に際しては姫を大盗人呼ばわりする者、病になり息絶える者など姫のせいではさんざんな目に遭う。これらの話の展開は、男性主人公が登場するまでの謎かけ姫にかなり近い。

男性から見た場合、かぐや姫は日本の典型的なアニメ像といえる。河合（1977）は、男性の心の中の女性（アニメ）について、男性の無意識の中で重要性を持つ女性像が存在していて、男性を未知の世界へと誘うという。かぐや姫はそれぞれに難題を出して、それを手に入れるための旅に男たちを出かけさせる。女性（女性の要求した宝物）を獲得するための旅は様々な経験を男性に与え、男性の内的世界を豊かにする。しかし、一方河合（1977、pp.185-186）は「未知の世界へとさそうアニメは、否定的な面をもつことも忘れてはならない」と「アニメの誘惑に負け、不用意に裸になって未知の世界へはいりこもうとするとき、男性は破滅の道を歩むことになる」と指摘する。難題を出されて翻弄する貴人たちにとって、かぐや姫は否定的なアニメイメージが強い。かぐや姫について河合（1977、p.189）は「残酷さということを感じさせないが、すべての求婚者に不可能な難題を与え不幸におとし入れて、自分は結婚することなく月の世界に帰ってゆくだけだから、真にクールなアニメ像といわねばならない」、そして「日本人の心の中のかぐや姫像は非常に強烈で

あり、異性ととの結合の否定という犠牲の上に立って、『あはれ』の感情を洗練させてゆこうとする態度は、日本人の美意識を支えるひとつの柱となってきたと思われる」と結ぶ。

V、かぐや姫と謎解き姫

かぐや姫から見ると、この求婚難題はどのような意味を持つものだろうか。河合（1982）は「あわれ」という感情をキーワードとして、日本の昔話に現れる女性像から日本人の心について考察している。その中の「うぐいすの里」で男に卵を割られて立ち去った女性像との繋がりから、かぐや姫について次のような連想を述べている。かぐや姫こそ、男性の信頼し難いことを嘆いてこの世を立ち去った女性が残していった子どもであり、母の「うらみ」を晴らすために、この世にやってきたのではないかと考えると、彼女が高位高官の男性たちに、実現不可能な課題を押し付け、苦しめることもよく理解できるという。この河合の意見はかぐや姫を男性のアニマとしてでなく、かぐや姫という女性の視点から考察した内容である。また、シラーの戯曲によるトーランドット姫はなぜそのような行動をするのかの理由の中に男性に侮辱された女性の恨みを晴らすためだという内容を語る（Lüthi, 1968: 野村訳, 1974）。結婚したくないと難題を出すかぐや姫と謎を出す謎かけ姫の心の底にあるのは男性への恨みであった。

それでは、同様の思いを持ちながらも、難題をやり遂げる男性が最後まで登場しないかぐや姫と謎を解いて結婚する男性が登場する謎かけ姫の違いはどこにあるのだろうか。男性が謎を解いて成功する昔話から考察する。

ここで取り上げるのはドイツのハルツ地方の昔話の「魔法をかけられた姫」である（Jacoby, M. et al., 1978: 山中監訳, 2002 年より）。話の中心の骨組みは謎かけ姫と同じである。主人公は道連れと共に旅をする。ある町に山の精に魔法をかけられた姫がいて、姫を救おうとする者は、姫の出した謎が解けないときは殺されてしまうという。主人公は道連れの助けを借りて、謎を解き、姫と結婚する。この話はその後も続くが、ここでは謎を解くまでの物語を取り上げる。この話から分かることは、謎を出す姫の背後には姫を支配する

強大な力をもつ山の精（個人を越えた父親像）という存在がいること、主人公は山の精と対決してその首を切り落とさなければならないこと、そして、そのことをやり遂げるためにはこの世に生きる主人公の力だけではだめで、あちらの世界に通じる道連れ助けが必要であったことである。この道連れとは、主人公が旅の初めに、全財産を支払って埋葬した死人の霊であった。女性を救う（女性が現実根ざした生活をする）ためには女性を捕えている心の中の男性像（アニムス）から女性を解放しなければならないのである。そのために男性は命の危険を冒す覚悟で女性（実際はその背後にいる男性像）と関わらなければならないのである。その男性は現実（外側）の世界に生きる力を持つだけでなく、現実を越えた（内側）の世界のことも理解する力が必要である。

昔話には男性求婚者が登場し、姫を救い出すが、心理療法においては治療者があちらの世界に捕われている女性をこちらの世界に引き戻す役割をとる。カルシェッド（Kalsched, D., 1996: 豊田監訳, 2005）はユングの報告している非常に興味深い事例を紹介している。それはかぐや姫と同じく月の世界に住むというファンタジーを持つ女性である。彼女のファンタジーは、「魔法をかけられた姫」に似通ったイメージを持つ。彼女を捕えている月の世界には翼をもつ吸血鬼という超越的な男性像（アニムス）がいること、そして、こちらの世界に連れ戻す役割として男性求婚者の代わりに治療者であるユングがいたことがわかる。そして、治療という形で行われたその戦いが相当すさまじいものであったことも窺われる（Kalsched, D., 1996: 豊田監訳, 2005, pp.108-111）。

かぐや姫は月の住人である。この昔話風に捉えるなら、月というあちらの世界に捕えられている女性ということもできる。この捕われから解放しこちらの世界に引き戻す存在が必要なのである。それができるのは、女性の美しさに魅入られて近寄っていく男性でなく、自分の意志で命をかけてその女性のために戦う覚悟や信念をもつ男性でなければならない。グリム昔話など、西欧の昔話の男性主人公はそれにふさわしい役割を取ることができるが、日本の昔話の男性主人公がそのような行動を取るのには難しいのかもしれない。西欧と日本における男性性イメージや自我のあり方の違いと言えるかもしれない。

Ⅵ、昇天

『竹取物語』では、かぐや姫は元々月の住人で月に帰っていく。この結末は、「竹姫」と同じである。「天に昇る時が来たと、飛んでいく」「十五夜の朝、天に呼びもどされてしまう」「雲に乗って帰る」など、類話により変化はあるが、翁の元に留まることはなく天に帰っていく（関、1978b）。「竹やぶにいた女の赤子二人を爺婆が育てる。成長して織った布が高く売れて大金持ちになる。天に昇ると言って姿を消す。爺婆が二人を捜して歩いていると、星から『世話になった』と言って黄金の花を降らせる」という爺婆への感謝を美しく表現した話もある（『日本昔話通観』3）。

ここでは、関連が深いとされる羽衣伝説、それに関わる昔話「天人女房」を取り上げ、比較検討する。

まず、羽衣伝説として取り上げられる古い説話に、丹後の国の風土記の「奈具の社」がある。この話は、老夫婦が水浴びに来た天女の羽衣を隠し、帰れなくなった天女に、子どもになるようにいう。彼女のお蔭で家は豊かになる。その後老夫婦は自分の子ではないから出て行けと言う。天にも帰ることができず天女は悲しみ嘆きながらさまよい歩き、奈具の村に着いて気持ちは穏やかになりその村に留まったという（野口、1979）。この羽衣説話は、婚姻ではなく老夫婦の子どもとなったという点で、『竹取物語』や「竹姫」とのつながりが窺われる（野口、1979）。ただし、羽衣を奪われたまま、老夫婦の家から追い出され、天に帰れないまま地上に残らなければならないこの天女はあまりに悲しい。このような結末を伝えている昔話の類話もある（関、1978a）。

昔話「天人女房」は稲田（1988）のタイプでは、＜異類女房＞の221「天人女房」として分類されている。このタイプのモチーフは次のモチーフからなる（pp.337-338）。

- 1、 男が水浴をしている天女たちの羽衣の一つを隠すと、一人の天女が昇天できず、男の嫁になって子を生む。
- 2、 妻は子に教えられて羽衣を見つけ、瓜の種を残し、瓜の蔓を伝って天に昇ってこい、と書き残して天に帰る。
- 3、 夫が言われたとおりにして天に昇ると、いやがった妻の親が畑仕事の難題をつぎつぎに出すが、す

べて妻の助言で課題をしとげる。

- 4、 親に瓜畑の番をさせられた夫が、妻の警告にもかかわらず瓜を縦切りにして食うと、あふれ出た大水で川むこうへ流される。
- 5、 妻が、七日ごとに会おう、と言うが、夫はそれを七月七日と聞き違え、二人はその日しか会えなくなる。

以上が、「天人女房」のモチーフである。モチーフ1の中の「男が羽衣を隠す」というモチーフについて考えたい。天女が天に帰れなくなり男と結婚して子を生むことになった発端は男が天女の羽衣を隠したからである。結婚するために羽衣を隠すことはきわめて卑劣な手段であるが、その行為がなければ、地上の男と天女の結婚は成立しない。人が天女という上位の存在と関わるためには策略のような悪とされる行為が必要なのかもしれない。一計を案じ天女の嫁を手に入れたとするなら、トリックスターの要素を持つ男性主人公といえる。そこには『竹取物語』の求婚者にはない強かさがある。

ここではモチーフの5までが記載されているが、その結末は類話によってさまざまである（関、1978a）。モチーフのすべてが入ると、七夕由来譚になる。

モチーフの1と2の途中、隠してある羽衣を見つけて、後半の夫への書き置きなしで、そのまま妻は天へ帰るといふ夫婦の離別で終わる話も多い。これは『竹取物語』と同じ結末といえる。この場合、妻は翁媪と別れる悲しみを述べるかぐや姫とは違い、羽衣を見つけるとさっさと天に帰ってしまう。ここで終わる物語には、夫への思慕や未練はない。残された夫に未練が残るかもしれないが、妻には何の未練もない。天女が天に帰ってしまう時点で、二人の関係は切れてしまう。『竹取物語』あるいは関係が切れる異類女房と同じ結末である。

一方、モチーフ2の後半、そしてモチーフ3と展開する物語は天に帰って終わる『竹取物語』とは異なる結末へ物語を運んで行く。

妻は自分の故郷の天に帰るが、そこに夫を呼び寄せるのである。そのための手段を書き残していく。そして、その通り天に昇って来た夫に、親が出す難題をやり遂げることができるよう妻が援助するのである（註4）。ここには、二人の関係をつなぐための妻の意志がある。

人でない妻は人が暮らす地上に住むことができない。そのため、関係を解消する別離という方法をとる。しかし、ここにもう一つの方法がある。地上に住めない妻は自分の住処である天に戻るが、そこに夫を呼び寄せるのである。夫が天へ来ることができれば、夫婦が共に暮らすことができる。類話では、天で子どもと夫と仲良く暮らしたところで終わるものもある（関、1978a）。そのような結末に到るためには、夫を天へ呼び寄せる、つまり二人の関係を切らずにつなげる妻の積極的な動きが必要なのである。ここで関係をつなぐための努力をするのは、女性側である。

しかし、そのような女性側のつなぐ努力にもかかわらず、モチーフ4、5の話が加わり、天においても離れ離れになり、年に1日しか会えない結末となる。

「竹姫」と「天人女房」をつなげたような昔話がある（『日本昔話通観』24）。「爺が竹伐りに行くと、竹の中から赤ちゃんが出てくる。大切に育てる。14、5歳になったとき、空に昇ると言って昇天する。20歳になった娘は川に降りて水浴びをしていると、男が来て無理やり川に入り結ばれる。男の頼みで二人は夫婦となり子どもができるが、女は『7月7日に高い竹に帯をつけて立てかけてくれ。それを伝えて子どもに乳をやりに来る』と言って昇天した」という。竹姫がいったん昇天した後に再び、地上（川）に降りて、男と結婚し子どもができるが、地上に戻ることを約束して再び昇天する話である。「竹姫」と「天人女房」が結びつく可能性のあることを示唆する昔話である。『竹取物語』と異なり、この天女は天と地上を行き来できる。年に一度であるが、女性が天から地上に降りてきて夫に出会う、つまり地上での関係維持という結末をもつ話である。女性が自分の領域である天に夫を連れてくるのではなく夫の住む領域に天から降りてくる。女性側の譲歩とも受け取れるが、前半の話あつてのことと思われる。この話では、男側の積極性が前面に出て、半ば強引に天女を自分の妻にするが、タイプのモチーフ1の羽衣を隠すというような卑劣な手段は使っていない。純粹に天女に向かって求婚するストレートな男の思いに応えた形がこの結末であると見ることができる。

関係維持のためには少なくとも男女どちらかが関係をつなぐ努力を積極的に行う必要がある。「天人女房」では、女性側の積極的な夫への関与があった。そこに

は、かぐや姫にはないおおらかさやしなやかさが見られた。一言で言うなら、他者を包み込む母性というものであろうか。そのようなものが「天人女房」の昔話からは感じ取れる。

Ⅶ、翁の結末

なぜ、かぐや姫は翁を残して、昇天したのだろうか。この物語の結末について考える。

最後の場面で、かぐや姫が地上に降りた理由、かぐや姫は罪を犯したためにこの地上の世界に降りることになったと明かされる。罪を犯したために地上に降りた主人公の昔話に「たにし長者」がある。

上坂（1978、pp.167-168）は「たにし長者」を取り上げて、かぐや姫との合致点を以下のように述べる。

- 1、竹取翁と小作農民とともに社会の底辺に生きる人々の夢を托した話であること。
- 2、老年になるまで子宝に恵まれなかった朴直な人たちが、異形の子を授かる。
- 3、異形の子（異常出生の子）は犯しにより変身させられていた。
- 4、罪消滅の条件を満たしたのもとの姿に戻る。

にもかかわらず、もとの姿に戻って地上を去るかぐや姫と地上に留まって長者となるたにし息子との根本的な違いは、説話として複合しているかぐや姫の場合と、単一なたにし長者の場合との違いによるのであって、『竹取物語』の寓意性が絡むと、上坂（1978）は論じている。

上坂が述べているのはその通りだが、ここではこの結末の違いについて、異なる観点から考えてみたい。

筆者は、この違いは、祈りや信仰の違いではなかったかと考える。「たにし長者」は始まりから祈りと信仰に満ちている（千野、2013）。ここで言う祈りや信仰は特定の宗教に対する儀式のようなものではない。それは上坂（1978）が述べているような純朴な人々が日々の生活を感謝する祈りである。「たにし長者」では、水神様に子どもが授かるように祈願し、たにし息子が生まれる。一方、竹取りの翁が、竹の中に女の子を見つけた時とても喜ぶが、神への感謝はない。「たにし長者」では、何かが起こるたびに喜びつつも感謝の祈りを忘れない。自分たちの生活は自分たちを越えた存在のお蔭とする気持ちがあるからである。そのような

精神性の中で物語が進行する。たにし息子はある時嫁と二人で祭りに行く。薬師様に参詣している間になくなった夫を必死に探している嫁の前に立派な若者が現れる。そして、これまでたにしの姿でいたが今日薬師様に参詣してくれたので人間の姿になることができた。夫は妻に告げる。ここには、妻の祈りとともに、夫への積極的な献身が窺われる。この献身とは自分のことはさておいて、夫のためを思って行動する動きである。

『竹取物語』は上坂（1978）も述べるように、作者の意図を持って描かれた作品であるが、ここでは翁の在り方を考えたい。翁のかぐや姫への愛情が並々ならぬものであることは、物語の初めから終わりまで一貫している。かぐや姫との別れに際して「何しに、悲しきに見送り奉らん。我を、『いかにせよ』とて、捨てては昇り給ふぞ。具して率ておはせね（どうして、悲しいのにお見送り申し上げよう。わたしのことを、どうしろとお考えになって、見捨てて空に昇っていらっしゃるんですか。わたしもいっしょに連れて行って下さい）」と翁は訴える（上坂、1978、pp.191-192）。姫を失うまいとして姫にしがみつくと翁自身の一方的な思いが強すぎて、姫の思いを理解するまでには到っていない。また、途中で登場する求婚者に対しても、姫の気持ちは横に置いて、翁の考えを述べて結婚することを促す。このように、翁の姫への愛情は姫を中心としたものではなく、翁自身を中心としたものである。

竹取の翁には、「たにし長者」に見られるような、祈りや献身が見られない。それは作者の意図に添った役割を取る人物として描かれているからであろうと思われる。しかし、本来、この物語は「竹姫」に描かれているような、子どもを得ることで致富となる物語である。昔話の中の竹取の翁は、子どもが来たことを喜び、素朴に天に感謝したのではないだろうか。

Ⅷ、おわりに

幾つかの昔話を参照しながら、『竹取物語』を見てきた。かぐや姫が一人天の世界に帰って行く潔よさは、私たち日本人の心に強く焼き付いている。しかし、一方で、彼女が月に帰らないで、この地上のどこかで翁や媼に見守られて、夫や子どもたちと楽しく過ごすことができないかとも考える。今回、そのような話を筆

者は見つけることができなかった。しかし、ここで検討したような他の昔話の中で起きる事柄が、この物語のどこかで生じるならそのような可能性もあると考える。今回の物語を検討して、関係をつなぐためにはどちらかの相当積極的な関わりが必要であること、そして、そこに多少悪的要素が含まれていてもそこから関係が生じることがわかる。相手はこれをおおらかにしなやかに受け入れる姿勢が必要であるが、この姿勢はかぐや姫の在り方と真っ向から反対する。

赤澤（2009）は「女性の自立」と言う視点で、月に帰った後のかぐや姫について自由に想像を膨らませた話の例を載せている。そこには、自立したかぐや姫が月の世界で仕事をして大成功した様子を描いている。その想像では、かぐや姫の自由で生き生きとした様子が伝わってくる。

註1：伊藤（1973）は、日本における竹取物語の類話、また中国をはじめアジアの説話を参照しながら、かぐや姫のルーツを探っている。伊藤（1973）は、竹中生誕伝承と難題求婚譚と天人女房説話の複合した物語の成立する可能性は、日本よりも中国大陸においてより高いのではないかと指摘している。

註2：豊田氏の講演は2016年8月に開催された国際分析心理学会において行われたものである。

註3：柳田（1963）は、竹取翁の社会上の地位について、老翁になるまで、竹を伐っていなければならない人、すなわち至って貧しい者という意味であろうと述べている。

註4：ここでいう親は父（神）であることが多い。その父が難題を出す構図は、『呪われた姫』の姫の背後にいる父親像である山の精の構図と似ている。しかし、『呪われた姫』の場合、山の精と姫の同一化が強いが、ここでは、天女は夫に味方する。

引用文献

- 赤澤淳子（2009）. かぐや姫:大野木裕明・千野美和子・赤澤淳子・後藤智子・廣澤愛子.
昔話ケース・カンファレンスー発達と臨床のアプローチ ナカニシヤ出版、pp.37-42.
- 稲田浩二（1988）. 演習版・日本昔話タイプ・インデックス 同朋舎.

- 稲田浩二・大島建彦・川端豊彦・福田晃・三原幸久編
(1994). [縮刷版] 日本昔話事典 弘文堂.
- 稲田浩二・小澤俊夫編 (1977-1990). 日本昔話通観
第3巻、第24巻、同朋舎.
- 伊藤清司 (1973). かぐや姫の誕生 講談社.
- Jacoby,M.,Kast,V.&Riedel,I. (1978). Das Böse im
Märchen : 山中康裕監訳 (2002). 悪とメルヘン
新曜社.
- Kalsched,D. (1996). The Inner World of Trauma:
豊田園子監訳 (2005). ト라우マの内なる世界 新
曜社.
- 河合隼雄 (1977). 昔話の深層 福音館書店.
- 河合隼雄 (1982). 昔話と日本人の心 岩波書店.
- Lüthi, M. (1968). ES WAR EINMAL...Von Wesen
des Volksmärchens : 野村滋訳 (1974). 昔話の本
質—むかしむかしあるところに—福音館書店.
- 野口元大校注 (1979). 竹取物語 新潮社.
- 小沢俊夫 (1958). Kinder-und Hausmärchen と竹取
物語 東北薬科大学紀要 5, 51-61.
- 関敬吾 (1978a). 日本昔話大成第2巻 本格昔話一
角川書店.
- 関敬吾 (1978b). 日本昔話大成第3巻 本格昔話二
角川書店.
- 千野美和子 (2013). 日本昔話「たにし長者」にみる
精神性 京都光華女子大学研究紀要第51号,
13-24.
- 上坂信男全訳注 (1978). 竹取物語 講談社.
- 柳田國男 (1963). 竹取翁 定本柳田國男集第六巻
筑摩書房 pp.157-185